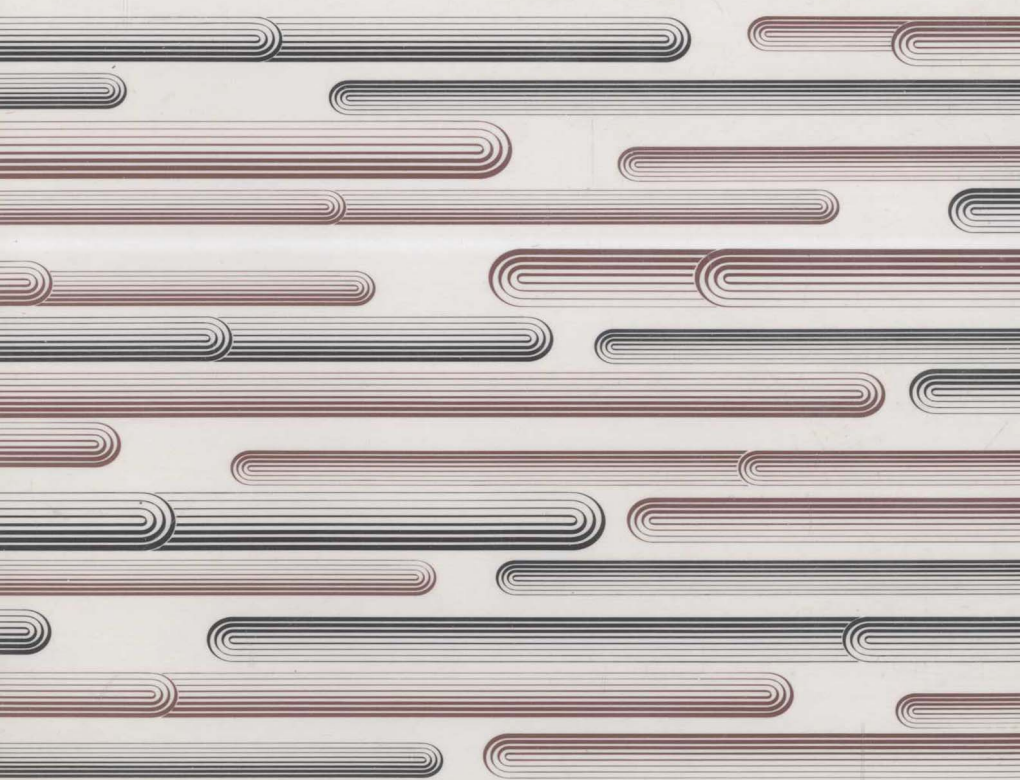


SEKAISHISO SEMINAR

日本文学の男性像

西島孜哉 編



世界思想社

日本文学の男性像

西島孜哉 編

世界思想社

〔編者紹介〕

1941年、京都府生まれ。大阪市立大学大学院博士課程単位取得。

現在、武庫川女子大学文学部教授。文学博士。

〔主要業績〕『近世文学の女性像』(世界思想社, 1985), 『西鶴と浮世草子』(桜楓社, 1989), 『近世上方狂歌の研究』(和泉書院, 1990), 『西鶴を学ぶ人のために』(共編著, 世界思想社, 1993)など。

日本文学の男性像

定価 2,500円 (本体2,427円・税73円)

1994年5月10日 初版発行

編 者 にし じま あつ や
 西 島 孜 哉

発行者 高 島 国 男

本 社 京都市左京区岩倉東五田町77 〒606

電話 075(721)6506～7

振替 01000-6-2908

世界思想社

東京支社 東京都千代田区猿樂町1-4-8 〒101

松村ビル

©1994 A. NISHIJIMA Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取替えいたします

(共同印刷工業・藤沢製本)

ISBN4-7907-0503-X

序

日本の文学史を鳥瞰すると、古代の神話から、近代の小説まで、その時代にふさわしい文学が生み出されている。それらの文学は、その時代の歴史社会的な条件の中で、精一杯に人間らしく生きようとした主人公を描き出している。文学作品の主人公のあり方は、それぞれの時代の精神を代表する典型となっているのである。

本書では古代から近代までの多くの文学作品に描かれた男性主人公を取り上げている。現代はウーマン・リブが叫ばれて久しく、すでにその言葉もインパクトを与えない感がある。女性の主張が注目を集めて、それぞれの分野での活躍がめざましい。女性を中心とした書物も数多く出版され、一つの重要な社会現象となりつつあるが、それは逆に近代までの日本の歴史社会が男性中心に展開されていたことを物語るものであろう。その事情は文学の世界においても同様で、古代から近代までの多くの文学作品は、その主人公を男性を中心としているのである。もちろん主人公が男性中心であったとしても、人間社会が男と女によって成り立っている以上、そこには女性の主人公も登場しているのは当然である。それらの女性主人公に焦点を合わせて、文学を鑑賞することも可能であらう。しかし文学作品の男性主人公が、その時代を象徴していることも、また事実である。

古代の神話に描かれた神々や英雄は、古代の口承という文学様式の中で語り継がれたものであったが、それはその時代にしか存在しえない必然性をもって登場しているのであった。平安時代の色好みの貴公子たちも、やはり貴族社会の代弁者として物語の中で華やかに活躍しているのである。また時代の変わり目には、その時代の矛盾を体現した主人公が、新しい文学様式の中で描かれているのである。たとえば中世における出俗の隠遁者たちや近世後期の市井の小悪党などは、時代の矛盾が生み出した主人公たちだが、同時に次の時代を準備するものであった。その意味では、各時代の文学作品を読み、登場する男性主人公をみることによって、古代から近代までの日本人としての人間のあり方を知ることができる。

本書に取り上げた男性像は、古代から近代までの代表的な文学作品の主人公たちである。それは自ずから代表的な文学作品の作品論ともなり、その作品を生み出した作者・作家の作者・作家論ともなっている。言わば男性像を通して、それぞれの時代の典型的な文学作品を鑑賞することになり、日本文学史の大きな流れを理解し、日本文学史を学ぶことにもなるのである。

ところで現代に生きるわれわれにとって、すでに過ぎ去った時代の人間のあり方は、どのような意味を持っているのであろう。たとえば近世の封建的身分制度の社会において、町人たちは人為的な遊廓において、虚の精神に支えられた粹人となって、遊女との間に美遊の世界を作り上げた。現代からすれば、遊廓の存在が否定されるべきもので、粹の精神そのものも今日的な存在価値を持たないことは言うまでもない。しかしわれわれは近世の遊里文学とも言える西鶴の浮世草子を読めば感銘をおぼ

えるのである。また近代の小説に登場する社会の脱落者・余計者である主人公たちは、現代的な視点からは否定されるべき存在であるにもかかわらず、読者にさまざまなことを考えさせる。そのことは古代から近代までのどの時代の文学についてもほぼ同じようなことが言えるのである。とすればそのような過去の文学作品から受ける感銘は何によるのであろう。

われわれは文学作品に描かれた未知の世界や出来事に興味をおぼえ、その美しい表現と見事な構成を楽しむのであるが、やはり主人公の真摯な人間的なあり方にもっとも大きな感銘をおぼえるのである。その人間的なあり方とは、その主人公が正しいと信じ、善と信じ、また美しいと信じて、全人格をかけてその目的に向かって突き進んでいる生き方なのであろう。主人公たちはその生きる歴史社会の制約を受け、やはり歴史社会によって規制された正しさや美しさを求めて苦悩している。われわれが感銘をおぼえるのは、その目的そのものではなく、その目的に突き進む生き方なのである。

国際化され、情報化された現代であるが故に、より深く日本の文化的な伝統を知り、それを現代に生きるわれわれの滋養とすることが求められているのである。本書が少しでも多くの人に読まれることを期待してやまない。

平成六年一月

編者

目次

I 古代文学の男性像 I

試練を受ける童男

——オホアナムチの神の場合

藤原茂樹 3

「ますらを」の愛と死

——『万葉集』『ますらを』の世界

竹尾利夫 25

II 王朝文学の男性像 43

色好みの貴公子

広瀬唯二 45

煩悶する貴族

鈴木紀子 66

Ⅲ 中世文学の男性像 85

抬頭する武士

——横紙破りの清盛像

岡田三津子 87

数奇の遁世者

鈴木徳男 103

滑稽な冠者たち

——狂言

稲田秀雄 119

Ⅳ 近世文学の男性像 133

歌舞伎者と剽軽者

羽生紀子 135

色道の達人と一代分限

西島孜哉 148

心中する遊蕩児

森田雅也 171

理想の武者と市井の義賊

服部 仁 187

V 近代文学の男性像 207

浮遊する目覚めた青年たち 田中邦夫 209

——『浮雲』『楚囚之詩』『舞姫』

他ならぬこの私という幻想 高橋博史 227

——志賀直哉の〈私〉

美の拝跪者 前田久徳 246

——谷崎文学の男性像

日本文学史略年表 羽生紀子 265

参考文献 297

索引

I

古代文学の男性像

試練を受ける童男^{をぐな}

——オホアナムズの神の場合

藤原茂樹

とこよ

「たにぐく」(多邇具久『古事記』神代卷)がことばを語る時代であつた。また、「くえびこ」(久延毘古同)が常世^{とこよ}の事情に通じている時代でもあつた。「たにぐく」はカエルのこと、「くえびこ」とは山田のソホド(桑山^{かかし}子)。常世^{とこよ}とは、平たく言えば、あの世のことだが、死の香りたちこめる異世界をさすばかりのものではなかつた。わが国の古代において、稀にながら、こちら側からそのあいだに横たわる空想の海を越えてぼつりぼつりと往き、また還るものがあると信じられた海彼の世界を常世と言つた。必ずしも隔絶しているとはいえない、古代人にとつて畏怖と憧憬のまなざしの先にあるはずの地理の国であり、そこは、また暗黒と死の匂いのたちこめる国。と、同時に幸福と長寿と永遠の時間が循環するというアンビバレンスな装いをもつ神秘の国と印象されていたことは、近代になって、まっさきに折口信夫が言い出したことであつた(折口信夫全集第二卷『古代研究 民俗学篇一』中央公論社、昭40)。

これから以下にお話したいそうと思う我が「おほくにぬしのみこと」の国土創造に際するよき協力

者すくなひこ少名毘古那神が、ガガイモのつる草製の天あめのかみ之羅摩船に乗りひじし鵝の皮でできた衣服を身につけ波の穂より常世から帰来よりきた話はこの国土に少し長く住む者なら誰ひとり知らぬものがないこと。彼は小人・小童といわれており、その短軀が示すあきらかさは、その海の彼方の理想の国が無時間性ばかりか、量りや尺度さえもない空間性に満たされていることを自ずから示している。

後代の例に属すが、歴代天皇の中で屈指の長寿を誇る垂仁帝（『古事記』では百五十三歳）さえ、常世へ行って戻らぬ多遅摩毛理たちまもりを待ち兼ねてついには命の灯火を絶やしてしまった経験は、軽々に往復できぬあるあきらめと、また持ちきた橘樹の照り輝くばかりの葉や実に永遠という若さのシグナルを感じ取る憧れをわが国びとに定着させるに至ったのである。

他界身・古代人の性生活

常世にゆく者の現れる時代が訪れるあいだ、神と人との婚姻より生まれた日子穂々手見命ひこほでみのことは無間勝間之小船くわまのせぶねに載り潮の味うまし路みちに乗じて魚鱗うろこなす綿津見神宮わたつみを訪ね塩乾珠しほふたま・塩盈珠しほみつたまをもたらししたこともこれも昔語りの一つである。ことはその壮麗な宮殿や豊玉毘売命とよたまひめのみこととの聖婚や失われた釣り針探しの話に覆われてしまいがちであるが、わが古代の空間認識として鵜葺草葺不合命うがふきあへすのみことの出産に象徴される海陸融合の世界観の存したことの意味を見落としてはならないだろう。それは人と神との血をひく者には、（折口信夫の絶筆「民族史観における他界観念」という難解な論文の中で見つめられた）他界身の存在が孕まれるという具体化を成す。

ウガヤフキアヘズは母の妹・自らの養育者であり、姨ははなる玉依毘売命たまよりびめのみことと婚姻を果たし四柱の男児を儲けるが、古代の男は多かれ少なかれ母の血縁を媒介としたそのような性生活の中にいたことを想像し得る。見方を変えれば、神武天皇の子である當藝志美美たぎしめいが神武皇后の伊須氣余理比売いすけよりひめを娶り、開化天皇が父の妻伊迦賀色許売命いかかしろめのみことを娶り崇神天皇を生むように、継母は夫の子との婚姻を予期し男は父の若き妻を直接の異性として意識におくことがあり得たことを示すものと受け取れる。そのことは一般的には王権の問題として言われるが、王権の問題から離れてみても、物語的心性としては遙かに遠く母の似姿を追い求め、ぬきさしならない状況へ進む『源氏物語』の前半部や、また継母の愛憎ゆえに追い落とされてゆく『愛護若』などの後代の物語へと連綿とつながる要因と思われる。少年期を中心とした継母との婚姻は神話的なタブーとして文化と倫理の変化の底で脈打つ問題として物語モチーフとして絶滅せず日本文学史の中で明滅してゆくのである。

神名の謎

現代という時代にたどりつくまでに、「おほくにぬし」像には時代ごとの衣裳が着せられてきたことは疑いが無い。たとえば、古代では「浦の島子」(『万葉集』)と言われた者が、いつの頃からか浦島太郎と呼ばれ、鵜匠のごとき着衣に亀に跨る姿をとっていたなど万葉びとには結ばれなかった映像であつたといえるように。松前健『日本神話の形成』(塙書房、昭45・5)によると、後世「おほくにぬし」は、インドの大黒天シバと同一視されたが、打出の小槌をもつ福德円満な大黒様の童顔は、日本の民

衆の人気の的となったとは言え、本来のインドの大黒天（マハー・カーラー）は、たくさんの頭蓋骨の首飾りをつけ、手に人間の屍体をつかみ、虎や鹿の毛皮をまとい、蛇を首にまきつかせた、憤怒の形相の神であるとのこと、両者は似ても似つかない。同様に、童唄にも歌われた大きな袋を肩にかけた大黒様の姿は、後述するように虐げられた存在ではあっても決して△福徳円満▽な絵姿をもつて読み解くことはできない。物語を読む限りその主人公ははるかに過酷な運命に遭遇し、痛めつけられ力弱い。古代から現代へ時代の衣裳をまといその印象が変化するのとはことの道理であり、読者はあらゆる先入観を対象化しときにそれを排除しなければならない。

この神はたくさんの名をもつ。それはひとつの謎にすぎない。この神話はさまざまな断片的にすぎるメッセージの集合体なのである。

大国主とはこの物語の主人公が物語のクライマックスでスサノヲから授与された神名であり、「大いなる国の主」の意味である。『古事記』の系譜によれば、主人公はその他に①大穴牟遲神、②葦原色許男神、③八千矛神、④宇都志国玉神の名をもち、『古事記』の物語によって前二者は偉大な神格を得るに至るまでの名であると知る。名の意味は、①「大いなる地の主」が転義して「大きな穴の主」、②「葦の原にいたる勇猛な男ないし醜い男」、③「数多くの矛」すなわち武神、④出雲の国の「国魂が体に憑る、現し身の人間」「国魂の化身としての巫祝王」とされる（松前健、同書）。④はスサノヲから授与された名であり、大国主の名の授与とともにその神格をもつて、スサノヲの娘スセリビメを正妻にし、立派な宮殿を建て、兄弟神を追い払い国造りを成し遂げた、言わば完成された王者の名前

である。③は王者となつての後の恋と歌物語の主人公としての名前であり、恋の相手は越^この国（現在の新潟県糸魚川辺りを考えてよい）のヌナカワヒメであるから、遠国への遠征に武神の威力をはためかせた名だともてよい。

さて、この稿では①②の名から王者の名を得るまでの経過に焦点をあてて論じてゆくことにする。

その際、地・穴^な・穴^なや、葦原^{あしはら}といつた原初的な性格から国や矛^こといつた文化的な性格へ成長する主人公をたどつてゆけばよいと一応の目安を立てるべきかもしれない。ただし、西宮一民（新潮日本古典集成「古事記」新潮社、昭54）は①を「偉大な、鉦穴の貴人」とし、穴^なは砂鉄を採る鉄穴^{かん}であり、穴^な・貴人^なとは「鉄を貴人と見立てた尊称」であり、「元来が鉄の神格化による産鉄地域の信仰神」と松前とは別の考えを示す。これが鉄穴の貴人とすればこの主人公は登場の始めから鉄器文化の代表者として物語に立ち現れたことになり、兄弟神に迫害を受け続けた主人公の受動的な立場とギャップが生じていることになる。そのことは、より古い物語においては主人公のもう一つ昔の名前、たとえば幼名といったようなものの存在を想定せしめるであろうし、現存物語は形成・改変の途次において少なからぬ知識を振り落としてきてしまったことを思わせる。その意味で物語に唯一度みえる②の名は注意に値する。穴^な・シコ^なとは醜いことを意味する言葉であるし、わが国の民俗では幼い子に意図的に汚い名や醜い名や生命力の強い動物の名などをつける風習が長く存在した。

ともかくも、いまみる大国主の神格はこれら個々の名の象徴するところや、またそれにまつわる伝承の総合されたところにあつた。それはわが国の神の中でも最も人間味あふれる神である、と同時に、

出雲人が崇敬しこよなく愛した神であった。それは裏返せばかれらの人生観から出た想像力の結晶といえる。オオクニヌシは欺かれつつ次第に知恵の光を輝かしてゆく。「愚かなること猫の如く、性懲りもなく死の罠に落ち込んだ」「愚かなる道徳家が、賢い不道徳者にうち負けて、市が栄えた譚は、東西に通じて古い諷諭・教訓の型であった」（折口信夫「万葉びとの生活」『古代研究 国文学篇』中央公論社、昭40所収）との評は、その仁慈の性格ゆえに人間にも通じる弱点として、虐げられてゆき続ける主人公が、困難の果てに幸福な生活を手にいれることになるという、誰の心にも灯をともしないではいられないストーリーを見事に言い当てている。古今東西おかたの庶民は、そのようにときに欺き、多く欺かれて生を送ることを余儀なくされてきた。知恵や仁愛やまた残酷ささえ美德とする心性が多くの古代人の心の中にとりもされてその想像力の大きな現れとしてこの神がいるのである。

とは言え、これらいくつかの名の集合体である神格が、ある構成のもとにあつたとしても、現存する物語はオホナムズをメインにして進んでいることは確かだ。その意味で、この物語の生成に当初より関与した集団を想定することは当初の物語やこの神の性質を具体的に照らし出す力になる。たとえば、寺川真知夫（『大國主神の国作の性格と大國主神の形成』古事記学会編『古事記研究大系4 古事記の神話』高科書店、平5・6）が指摘したのは、諸国を遍歴する大穴牟遲神おほあなむぢの祭祀者集団は、その性格として後に密教を受容して山伏となっていくシャーマンとしての山林修行者であり、呪験力による病気の施療や薬剤師であり、ために鉞物を探索する山師でもあるとする。これは当然稲羽の素戔の挿話や主人公の死と蘇生物語や根の国遍歴譚を視野に入れての具体的な見解である。たとえばまた、松本信広『日本神話の研究